スキルという名の超能力

秋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スキルという名の超能力

【Ｎコード】
Ｎ１０２７Ｗ

【作者名】
秋色

【あらすじ】
世界にはスキルという異能の力が存在する。スキル『超反応』を持つＳランクの主人公、天音。
スキル『記憶改変』を持つＳランクの少女と共に、世界を徐々に変えて行く……予定！

※チート設定が苦手な方には合わないかもしれません……。

プロローグ

遥か昔、世界には『スキル』と呼ばれる異能の力がなかった。
だが現代は違う。世界各地で『スキル』が普通に使われ、使える事が普通。使えない時代があったなんて信じられない。

今では、学習能力はもちろん――スキルの力の強さで人生が大きく変わる。

多くの能力者は『依頼』をこなし、生活している。
Fランクの依頼からSクラスの依頼までがあり、スキルの強さによって受けられる依頼のクラスが変わってくる。

スキルレベルと呼ばれるものがあり、これもFからSまで振り分け割れる。
学校や施設などでスキルレベルを測定してもらい。
自分のレベルにあった依頼を受けられるというシステムだ。

もちろん一つ下のクラスの任務は受けることが可能だ。

クラスによって報酬額も大きく違ってくる。

◇◆◇◆◇◆◇

スキル（日本名：超能力）
異能の力。
人それぞれスキルは違い、強さが違う。
火や水を操るスキルや相手の心を読むことができるテレパシーと呼ばれるスキルが存在する。

それ以外にも様々なスキルがある。確認されていないスキルも存在する。
いつの時代から使われるようになったのかは不明。解明されていない。
たが歴史を辿って行くと遥か昔、スキルなどという異能の力は存在していない。

ｓｉｎ国語辞典より抜粋

◇◆◇◆◇◆◇

現在時刻は午前十時を少し回ったところ。
朝というよりもう昼と言ったほうが正しいだろう。

田舎の夏の暑さは地味に暑い。
夏なのだから都会だろうと田舎だろうとあまり関係ないのだろうけれども。
外では蝉が五月蝿く鳴き止むことを知らない。一週間の短い晴れ舞台。夜でも朝だろうと関係なく一週間鳴き続けている。一週間経っても新たな蝉が鳴き始める。夏特有のループかもしれない。などと訳の分からない事を考えながら周りが田んぼの農道をゆったりとした速度で歩いている。

「暑いなぁ……蝉五月蝿いし、夏休みなのに学校だし、暑いし、遠いし、汗は出てくるし、暑いし暑いし暑いし」

少し長め綺麗な黒色のストレートな髪が熱を浴びとても熱くなっている。
その長めの髪の向こう側には、気だるそうな二重瞼の黒色の瞳が見える。

目鼻も整っているのだが、全体的に疲れているオーラが滲み出ていた。

中学三年生。夏休みといっても補習とかで青春を謳歌することはできない。

こんな時間に誰もいない。なぜなら補習は午前九時から始まっているのだ。

それでも男は暢気に自分のペースで歩く。

いや、どちらかと言うと少しでも時間潰すために遅く歩いている。

「……氷系のスキルとか体を強化するスキルが羨ましい」

氷系のスキルは想像通り、冷気などを操り涼を確保することができる。

体を強化させるスキルとは、言葉通り、体を硬くしたり、足を速くすることも可能にするスキルだ。体の体温調節をできるスキルもある。もちろんスキルの強さによって強度や速度なども大きく変わってくるのだが。

体を硬くすることができるなら大抵の場合はその身体強化しかできないのだが、レベルによっては体を硬くする他に足を速くしたり、体温調節と複数の効果を持つ能力者がいる。

そんな愚痴を零しながらも学校へと着く。

周りには小学校、役場、田んぼがあり、お世辞にも都会とは言え

ない。
そう、男の住む町は日本の中でもかなり田舎の部類に入る。
階段を上り二階にある自分のクラスを目指す。
男は一切遅刻したという罪悪感が感じれない。
今でも気だるそうな顔をしながら階段を上っている。

ガラガラとドアの開く音が教室内に響き渡る。
「すみません。蝉が夜遅く鳴いていて中々寝付けなく、寝坊してしまいました」
教室内に居た生徒はもちろん、教師までも音の方へ視線を移す。
どうやら数学の補習の時間だったらしい。
黒板には訳の分からない数式が並んでいる。
訳が分からないってのはマズイはずなのだが、男は気にした様子もなく一言声を掛け廊下側の一番後ろの席へと座る。
「霧崎、幾ら進学先が決まってるからって調子に乗り過ぎていないか？」
二十台後半の男教師が少々苛立ち混じりの声を発する。
男はそれに「すみませんでした」と軽く答え机に肘を突き黒板を見つめる。
教師はまだ何か言いたげだったが、何も言わずに授業を再開する。

霧崎と呼ばれた男は教師の言うように進学先が決まっている。
もちろん推薦で、幾ら推薦でもこんな早い時期の推薦は中々ないだろう。
彼は――『スキル特特待生』として高校の入学を確実に決まっているのだ。
特待生よりも上の特特待生。
スキル能力に秀でている者が選ばれる。
もちろんかなりの実力が必要である。

◇◆◇◆◇◆◇

〈霧崎　天音〉十五歳
十歳の頃にスキルが覚醒。
中学に入り、『化物』の片鱗を見せ始めた。
スキルの力が絶大な者が多く通う東京にある超有名校の高校に進学が確定。
学習の方面ではあまり目立っていないが、運動能力、スキルともに超一流。
この歳にしてSクラスの実力。

能力者危険分子より抜粋

スキル名『超反応』
日本ではまだ一人しかこの能力を持つ者は確認されていない。
スキルの詳細についてはまだ解明されていない。
彼のこれからの成長によって大きく変わるだろう。
ただ分かる事は、人間の持つ反射神経の約五十倍の速さで反応が

できるという点だけだ。

スキル辞典より抜粋

◇◆◇◆◇◆◇

天音は内心、学校なんてどうでも良いと思っていた。

頭の中は都会の有名校の事で一杯だ。

あと約半年。待ち遠しい。早く色々なスキルを見て見たい。

何より――依頼の難易度が楽しみなのだ。

依頼の難易度は、学校、施設によって変わる。

田舎は人口も少ないので難しい依頼が少なく、本当に難しい依頼などは都会のほうが成功確率が高いため都会のほうで依頼してしまう。

それに超有名校となれば、依頼の難易度は跳ね上がることだろう。

従って、ここでのSランクの依頼でも、超有名校でのランクはEランクくらいまでに落ちることだってある。

なのでもちろん田舎で測ったランクでは釣り合わないため、その地域で測り直しとなる。

と、言ってもSランクの化け物は既に力を証明されて推薦されている訳だから測り直すことはない。

天音を知る者の多くは彼の事をこう呼ぶ。

「痛みを知らない鬼神」

超反応という能力のおかげでどんな攻撃も当たらないことからこのような通り名がついた。

天音自身、特に気にしておらず、言いたい奴には言わせておけば良いと思っている。

恥ずかしいとも何とも思わない。

自分のすべては『力』だけ。

たが『化物』は天音一人だけではない。

田舎のこの中学校にはもう一人の『化物』がいる。

もう一人の『化物』。

それは黒髪の美しい大和撫子を思わせる美少女だ。

『化物』なんて言葉はもちろん似合わない。

漆塗りのような黒い髪は肩まで伸びており、目鼻はこれでもかというくらいに整っており、少し釣り上がったキツイ目が特徴的な彼女。

彼女にも通り名がある。

「冷徹な悪魔」

通り名の由来は分からない。
誰が付けたのかも分からない。
ただこんな田舎に『化物』が二人もいる。

『化物』には人なんて寄ってこない。
特待生クラスの能力者は『天才』と呼ばれるに対して一つランクの上の特特待生は『化物』と呼ばれ、怖がられ、恐れられる。

年間その『化物』は大体十人から三十人が全国から集められる。
その年によって基本はバラバラ少ない時には十人にも満たない場合もある。もちろんその逆も。
その『化物』を集めた学校、天音が来年から通う都会の超有名校の『涼夏学園』だ。

◇◆◇◆◇◆◇
〈桜庭　枝垂桜〉十五歳
六歳の頃にスキルが覚醒。
だが能力は強力過ぎて彼女の手には負えなかった。
中学に入るまでは能力一切を使わなかった。
中学に入り『ある事件』により能力を行使。
それをキッカケにわずか一ヶ月でSクラスまでに上り詰めた。
スキルの力が絶大な者が多く通う東京にある超有名校の高校に進学が確定。
学習面においても優秀で、運動能力、スキルは超一流。

危険分子より抜粋

スキル名『記憶改変』

能力者

日本ではまだ一人しかこの能力を持つ者は確認されていない。
スキルの詳細についてはまだ解明されていない。
彼女のこれからの成長によって大きく変わるだろう。

ただ分かる事は、相手の記憶を変える事ができるということ。
動物実験により効果は実証済み。

スキル
辞典より抜粋

◇◆◇◆◇◆◇

時刻は昼の十二時を少し回ったところ。
補習は既に終わり、天音は一時間ほどしか授業に参加しなかったことになる。

今は学校に残り、焼きそばパンを片手に渡り廊下に張り出されている依頼を何となく見ていた。
数人の生徒が依頼を見ているが、もちろん天音に話しかけようとする者はいない。

（ん～……全部いまいちなんだよな～。面白くもなさそうだし、何より報酬少ないしなぁ……）

掲示板に張り出されている依頼はFランクからAランクまでの依頼が張り出されている。

もちろん見ているのはこの中でも一番難易度の高いAランクの依頼だ。
天音は現在、金に困っていた。
理由としては、姉に巻き上げられた。これ一つしかない。

天音自身はあまり使わない。せいぜい服を買ったり、昼食を買ったりするくらいだ。
たまに電化製品などを買ったりもするのだが。

だが、Aランクの任務には報酬が一万円から二万円ほどの依頼しかない。
これだけじゃ、姉に巻き上げられたらすぐに無くなってしまう。

しかも依頼は、告白の手伝いをお願いしますだとか、借金取りに追われています、助けてください。とかだ。
天音の能力では後者はできるが、前者は無理だろう。
こんなのがAランクだと思うとため息が出てくる。
そりゃ、依頼料を高く学校側に払えば成功確率を上げるためにランクを上げてもらい、その依頼に合ったレベルの能力者が依頼を受ける。
たが、流石にAランクとしてのプライドのためにも、こんな依頼はCランクレベルの奴等にでも任せておいても大丈夫だろう。と天音は思う。

（……仕方ない。こうなったら低いランクでも良いから何かスカッとする依頼探すかな）

さすがの姉も金がないのなら取ることはないだろう。と考え、安い報酬でストレス解消になるような依頼を探し出した。

僕と一緒に裁判に出てください。求む！　電気系能力者！　などの依頼を一つ一つ見進めて行く。
五つほどの依頼を見進めて行くと、気になる依頼を一つ見つけた。

【いじめている奴等に復讐を……】ランク：D　報酬：二千円　定員：一～二名

普段ならこのような依頼は張り出されない。
理由としては、復讐なんて言う言葉は学校に不適切だから。
それなのになんでこの依頼が張り出されているのだろうか？　と俺は気になった。

無意識のうちに天音は依頼を受けてみようと決めた。
理由は、この依頼の張り出されている理由はもちろん。いじめられている人を救いたいと言う思いだった。偽善者気取りも良いところだろう。
だが腕はもうその依頼に手を伸ばしている。

コツ。と腕の甲に何かが当たる音がした。
いや何か当たっている。

手だ。
その手の伸びている方へと視線を向ける。

すると、そこには――「冷徹な悪魔」がいた。

彼女は、きょとんとした顔で俺に顔を向け、天音の顔をぼんやりと見ていた。
ぼんやりとした感じなのに目のせいで少しだけ睨まれているようだ。

「……あの？　なんで黙ってみてるの？」

すると、彼女はハッとしたように顔を引き締め目を細め天音を見据える。

「何？　あなたもこの依頼なの？」

「あぁ、そう。少し気になってさ」

すると、彼女は困ったように顔を顰める。

黙り込んで、人差し指を唇に当て何か考えているようだ。

天音は内心、緊張していた。

彼女の事は知っている。何せ同じ高校に行き、同じ『化物』なのだから。

彼女の能力は、記憶を変える事ができる。という事。

発動条件は不明。

彼女の能力を知っている者で近づきたいと思う者は少ないだろう。もちろん天音でさえも近づきたいとは思わない。

「依頼人数……二人まで良いのね……でも……嫌よ、ね？」

彼女は小声で呟く。

聞こえていないと思っているのだろうが、天音は聞こえていた。

天音は少し考え、だが数秒ですぐに答えは決まった。

「ん？　二人まで大丈夫なら俺と君でも大丈夫だな。もし、君さえ

良ければ俺と一緒にこの依頼やらないか？」

最初は怖かった。

何かあれば記憶を変えられるのではないか？　と。

だが、初めて彼女を見て何となくだが、そんな事する子じゃないと勘だが思ってしまった。

自分を蔑んで生きているように天音は見えたのだった。

「え？　いいの？　……知ってるの？　私の事。やっぱり――」

「だあああ！　知ってる。俺も君と同じ『化物』だしさ。それじゃ、はいコレ持って」

天音は彼女の言葉を遮り、強引に張り出されていた依頼書を剥がし、彼女の手に渡す。

依頼書は学校に依頼を受ける事を報告しなければいけないので、職員室に向かうことになる。

そこで、教師に印を押してもらい、生徒ライセンスを見せればそれで依頼の登録は完了である。

あとは依頼書に書いてある、日時、場所が指定されているのでそれに従うだけ。

「そう。あなたも私と同じなのね。……そうよね。前に進まなきゃ、よね」

またしても小声で何か囁くが、天音は人並み以上に聴力が良いため、何となくだが聞き取ることができた。

それでも天音はあえて言及しない。

別に彼女の過去を知りたいとも、深く関わろうとも思わない。
ただ仕事をこなすだけだ。

ガラガラガラ。職員室のドアが勢い良く開かれた。
ここでは教師達皆が一斉に視線を向けて来ることはない。
生徒達が多く出入りをするためだろう。

だが、この二人は普通の生徒達とは全く違う次元に存在している二人なのだ。
二人一緒に職員室を訪れるとなると話は別だ。

視線をこちらに向けた教師は明らかに驚いている。

天音は内心、それを楽しむように歩いた。

中学編1　怪しげな依頼（前書き）

一日一話更新！　と思っていたのですが予想以上に時間が厳しく……少々遅くなる可能性があります。

そこのところ了承して頂けると嬉しい限りです。

中学編1　怪しげな依頼

職員室のちょうど中央の列に担任の教師の机があり、担任の教師はそこでパソコンに何か打ち込んでいる。

中央の列に着くまでに既に多くの教師が天音と彼女の事を驚愕した顔でこちらを見ている。

後ろから、はぁと大きめのため息が零れた。

後ろをちらっと見ると彼女は大きなため息とともに、やれやれといった感じで指で額を押さえている。

天音は、何がそんなに嫌なんだろう？　と不思議に思ったが、すぐに答えが分かる。

『化物』この単語が頭をよぎった。

天音は自分の能力のせいで『化物』と呼ばれていても関係がない。むしろ、この能力があって感謝しているくらいなのだ。

だが、彼女は違うのかもしれない。

能力のせいで『化物』と呼ばれる。それが耐えられないのかもしれない。

能力なんていらなかった。と考えているのかもしれないのだ。

天音は同じ『化物』の気持ちなど一切分からなかった。

「先生、依頼を持ってきました。登録お願いします」

いつも通りの言葉を担任に投げ掛け、彼女に声を掛けると彼女は担任に依頼書を提出する。

担任は驚愕の表情を隠しきれずに僅かに声が震える。

「な、なんでクラスが違うのにお前達が一緒の依頼を受けるんだ。駄目だ。お前達二人は許可できない」

天音は頭の中が僅かに頭の中が熱くなったのを感じた。

依頼を受けるのにランク以外に特別な条件はないはずだ。

それなのになぜ『化物』同士だからと言って拒否をされなければいけない。

クラスが別々でも依頼を受けることは可能なはずなのだ。

その事を担任に告げようとすると、担任から、なるほど。と言葉が聞こえた。

担任は頷きながら、告げる。

「この依頼か……お前達には丁度良い依頼だろう」

そう言うと担任は、机に向き直り自分の名前が彫られている印を押すと、天音と枝垂桜にライセンスを提出するようにと促す。

二人はライセンスを渡すと依頼の受付は終了した。

二人は教師にこれ以上何も話しかけてこない。

天音と枝垂桜はなぜ教師が許可したのか予想できていた。
この依頼は学校側に取って都合が悪いのだろう。
それくらいしか理由は思い浮かばない。
だから『化物』に任せようと。いう魂胆なのだ。

『……』

二人は職員室を出たのだが
その後、どうして良いのか分からず二人して無言になっていた。
天音は気まずそうに頭を掻きながら、どうするべきなの？　と考えていた。
枝垂桜は天音が言葉を発するのを待っているのか、じーと天音を見ている。
二人はもちろん一緒に依頼をこなした事など一度もない。
それどころか、他の誰かと依頼をやった事自体ないのだ。
だから『普通』というのがいまいち分かっていない。
「……そういえば、私、あなたの名前知らないわ。通り名くらいなら聞いたことあるけれど」
沈黙を破ったのは天音の方を見ていた枝垂桜だった。

枝垂桜は良い事言ったでしょと言わんばかりに、意地悪な笑みを作り、未発達な小さな胸を張る。

「な、何？　その顔は。なんで私良い事言ったでしょ？　みたいな顔してんの！？」

小さな胸を張っている枝垂桜に意味が分からずにツッコミを入れてしまう。

すると、枝垂桜はむっとした顔を近づけてくる。

「あの気まずい状態から『普通』な質問をした私を褒めるべきだと思うのだけれど？」

頭一つ分ほど小さい枝垂桜に下から睨まれ、天音は意見することができなかった。

確かにナイス質問な気がするな。と返すと枝垂桜は、うん。と頷くと満足そうに顔を崩している。

「何か性格がさっきと違う気がしてならないんだけど……」

心の底からの感想をつい呟いてしまう。

が、幸い枝垂桜には聞こえなかったみたいで何も言ってこなかった。

「それじゃ、自己紹介しましょうか」

話を本題に戻すと枝垂桜は自分から自己紹介を始める。

「私の名前は〈桜庭　枝垂桜〉よ。あとは……言わなくても分かるよ、ね」

お嬢様のようなしゃべり方をする。という印象が強かったのだが、どうやらそうでもないようで、たまに素が出ているようだ。

「シダレ？　へえ～。変わった名前だな。俺は〈霧埼　天音〉。こっちの情報も何となく知ってるか」

「アマネって名前も相当変わってると思うわよ？」

枝垂桜と書いてシダレと読むことが分かり、自己紹介が終わった。

『……』

またしても二人は無言。

それはそうだ、二人はそもそも他人と関わる機会があまりにも少ない。仮にあったとしても自分から遠ざけてしまうのだろうけども。

その後ほどなくして今日のところは解散となった。

補習も午前中だけなので、今日は帰るだけ。

依頼の指定日時は、明日の早朝七時に丸道駅集合。というメールが先ほど届いた。

依頼を受けた後に依頼主に担当の教師、職員が連絡をし、ライセンスに記載されている連絡先に依頼主自ら依頼を受けた者に、指定日時などの連絡事項のメールを送るのが義務になっている。

というわけで、明日の補習は受ける必要がなくなった。

学校の方針にもよるのだが、この学校では依頼＜学校となっている。

学業優先。という学校から見たら変だと思うかもしれないが、依頼をこなして生活をしていく上でより多くの知識を学ぶ学業か、生活に必要な仕事か。と選択を強いられた時、半分以上の者は生きていくためには仕方ない。と考えるだろう。

取り敢えず、明日は初のペアでの依頼だ。

天音にしては珍しく緊張していた。

ペアどころか今まで他人と一度も組んだことがない天音にとって、どのように行動すれば良いのかも解らない。

取り敢えずは、枝垂桜が動き易いように自分の行動は自重しようと考えているのだが……。

その頃、枝垂桜が全く同じ事を考えてるなんて天音は思いもしていなかった。

早朝六時半、田舎にも関わらず丸道駅周辺は出勤する者や部活があるのだろう、学生の姿が多く見られた。

「そりゃあ、平日だしな。人が多くて当たり前か」

天音は興奮と緊張で眠が覚めてしまい、少し早めに着いてしまったのだが、そこには早くも枝垂桜の姿もあったのだ。

お互いもちろん時間が早いことは分かっていたので、少々気まずそうにしているのは気のせいではないだろう。

コイツなんでこんな早くに来てんの？　どんだけ緊張してんの？って思われていないかと天音はそわそわしている。

枝垂桜はいうと、

「……こ、こんなに早く来るつもりはなかったのよ？　で、でも寝苦しくて、早く起きちゃっただけなのよ？」

視線を地面に合わせ俯きながら、ぶつぶつと言い訳を垂れている。

そこで天音も何か言い訳しないと。と考え、頭が真っ白のまま口が先に動いてしまう。

「お、俺は枝垂桜さん一緒に任務できると思ったら興奮しちゃってさ、眠れなかったよ」

その時、ごっ！　という強い衝撃が頭に走った。

「っつぅ！？」

思わず情けない声を出してしまう。

視線を衝撃が発生した方向へと向ける。

と、そこには右の拳を振り下ろした姿の枝垂桜の姿が……。

それだけ見て分かる。この女、本気で振りかぶりやがった！

「な、何すんだよ！？」

すると、枝垂桜はみるみるうちに顔を朱色に染めていく。

「うるさい！　変態！　な、なんで私なんかで興奮なんかしてるのよ！？」

大きな勘違いが生まれていた。

怒気が籠った声音で放れた言葉に天音は言い返す言葉が見つからない。

……いや、彼女が冷静なら三十秒くらいで誤解が解けるのだろうが、今の枝垂桜はお世辞にも冷静だとは言えない。

天音が今言い訳を口にしたところで聞く耳を持たないだろう。

そう、判断して天音は言った。

「よし、もう一発殴って」

その瞬間、言ってから0，5秒とかかってないだろう。まさか枝垂桜も超反応の素質が！？　などと考える余裕もなく、二発目の右ストレートが天音の左頬を遠慮なく痛めつけた。

噴水の前に座り少しは冷静になった、枝垂桜に左頬を少々腫らせながらも天音は言い訳を口にしたのだった。

誤解はすぐに解け、枝垂桜は心配そうに「ごめんね？」と謝り続けている。

何回も「俺が悪かったんだし、気にすることはない」と言っているのだが何回も謝る枝垂桜だったが、唐突に何か閃いたように、左の掌に右の拳を落とす仕草を見せた。

「そうだ、私の能力で記憶消してあげるわよ？」

何やら真顔で怖い事を言い始めた。

天音は引き攣った笑顔で、

「はは、な、何も言い出すんだ？　枝垂桜さん。」

一応、間違いかもしれないと思い、もう一度聞いてみる。

それでも、枝垂桜はもう一度ゆっくりと、真顔で聞いてくる。

少々吊り上ったキツイめの視線に貫かれている天音は次第に冷や汗が出てきたようだ。

「枝垂桜さんじゃなくて、シダレでいいわよ？　だから――記憶消してあげるって言ってるのよ」

この時、天音は喜ぶべきなのか焦るべきなのかと非常に悩んだ末に、天音は焦るべきだと判断する。

初めて、天音は『化物』の怖さを知った。これが特特待生……。天音はこんなにも近くに自分よりも強い。だろう人を見たことがなかった。

それを肌で感じ、天音は引き攣った笑いが徐々に狂気染みた笑みに変わっていることに気が付いた。

天音はぶるっと武者震いが起きたように感じた。

こんな『化物』がまだまだいるのだと思うと、興奮を隠しきれない。

それでも興奮をどうにか収め、焦りながらも否定を口にする。

「そ、そうか。思ったんだけど、記憶消されても痛みは消えないし。別に俺の中での好感度が下がった訳でもないから記憶を消す必要性はないな」

「こ、好感度って何よ。私は別にそんな事は気にしてないの、よ？」

天音は「はいはい」と簡単に流し、ようやく一息つく。

枝垂桜はその間も「はいはい……って何よ？　し、信じてないわね？」などと言っているが華麗にスルーすることにし、そういえば、

朝飯食べていないな。と小腹が空いたのを確認し、枝垂桜に確認を取ってみる。

「枝垂桜さんは、朝飯とか食べてきた？　何も食べてないんだったら、あそこのコンビニでお握りでもオゴるけど」

「っ！　……え？　そういえば、何も食べてなかったわね……って、シダレで良いって言ってるでしょ？」

文句を言っていたのを強引に話を遮ったので、枝垂桜は一瞬驚き食べていない事を主張する。

天音はそれが分かると、よし。と言いコンビニに小走りに行ってしまう。

枝垂桜は「私まだオゴってもらう何て言ってないんだけど……」と小さく零していたが、流石に距離がありすぎたのか天音には聞こえていないようだった。

枝垂桜は早朝の六時四十分を少し回ったくらいの頃、駅前で一人色々と考えていた。

（天音君って変な人よ、ね？　お節介というか、馴れ馴れしいというか……同じ『化け物』と呼ばれているはずなのになんだか私とは全然違う。でも、天音君も他人と組むのは初みたいよね。……っ！？　も、もしかして私だけ特別って事はないわよ、ね！？）

そんな事を考えながらじーっと天音が入って行ったコンビニを凝視していると、視界が薄暗くなった。

誰かが枝垂桜の前に立っているのだ。

枝垂桜は太陽の光を遮る原因の方に視界を向けた。

中学編2　依頼主

予想通りコンビニの中にも多くの客がいた。
売り切れてしまうまえに少々急ぎ足でお握りコーナーに向かい、適当な物を二つ取るとサンドイッチコーナーにすぐさま移動し適当な物を掴む。

持ち切れなくなってきたのでカゴを掴み、後方にある飲み物コーナーへとホッと一息しながら歩く。
お茶二本をカゴに入れレジへと向かう。

レジにはほとんど人が並んでおらず、レジにはコンビニの制服を着た三十台後半くらいの女性の店員が一人だけで客をさばいている。
カゴをレジに置くと、店員が一つ一つバーコードを読み込んでいく。
すると、読み込み終わった品がまるで生き物のように浮き上がりごく自然な動作でレジ袋の中に納まっていく。
天音はさほど驚かず、この店員さんはこの店のエースなんだろうなぁ。などと落ち着いていた。

そう、この世界では当たり前の光景。
このように自分の能力にあった職を探しそこで稼ぎ生活をする者ももちろんいる。
日当が決まっており、依頼よりは自由も日当も低い場合があるが安定した収入が入る。というメリットもある。

レジ袋の中身には、鮭のお握りが二つと明太子が二つ、後は色々な種類が入っているサンドイッチと、お茶を二本入っている。

枝垂桜の好みが分からなかったので万人受けする品物を買ってきたつもりだ。
この中なら何か一つくらいは食べられるだろう。
もし残ったとしても全部、天音は食べるつもりでいたので心配はないのだが。

残り少ない金額となった財布の中身を見て、大きなため息を吐きながら先ほどまで座っていた噴水の方へ顔を向ける。

と、そこには何やら不穏な空気が流れているように見える。
なぜ不穏な空気が流れているように見えるのかは、座っている枝垂桜の前に立っている男がいるからだ。
ただ、依頼主という可能性もあるので普通なら不穏だとは思わないだろう。
だが……男の髪が赤色だったのだ。
天音には、茶髪までは許せても、金髪などを見るとどうしてもロクでもない奴だと思ってしまう。
金髪でもＮＧなのに赤色の髪など論外だ。
顔も見ないうちに悪い奴と決めてしまっていた。

これは天音の悪い癖だろう。

『外見だけで人を判断するのは間違い』

その概念が天音には存在していなかった。

とは言っても天音は別に枝垂桜の心配はしていなかった。
自分よりも強い能力者なのだ。

あんな髪の色の奴に負けるはずがない。と分かってはいたが枝垂桜が怪我しないようになるべく早く駆け付けるために走って噴水に向かう。

数秒で噴水の前に着く。

こっそりと赤い髪の男の後ろに忍び寄り、天音は両腕を持ち上げ男の背中の後ろで吊し上げる。

「っっっつ！？」

赤い髪の男は声は声になっておらず、呻き声を漏らしている。

天音は低い声で短く言い放つ。

「何か用でも？」

すると、赤い髪の男は首をぐるりと半回転させ天音を視界に写す。

男の顔は驚いたように眼を丸くした。

ん？　と変な空気を察した天音は枝垂桜の方に視線を移すと、枝垂桜は頭を抱え項垂れている。

咄嗟にまさか。と思い、男の手を離す。

「ってぇな。依頼主に手を出す、奴なんて聞いた事ねぇぞ」

思った通りこの赤い髪をした男が依頼主だった。

男は天音より二つか三つほど年上だろうか。

近くの高校の制服を着ている。

天音は素直に自分が犯した無礼行為を謝る。

「すみません。てっきりヤンキーかと思いまして……」

「お、お前喧嘩売ってるんじゃないだろうな？」

赤い髪をした男はニヤニヤとした笑みを浮かべて拳をこきこきと愉快そうに鳴らしている。

「滅相もないです。赤い髪の男が依頼主だからって喧嘩なんて売ったりしないですよ」

天音も天音もやめとけば良いもののニヤニヤと悪戯好きな子供のような無垢な笑顔を振り撒き赤い髪の男を挑発する。

これも天音の悪い癖だろう。

天音は相手が年上だろうと関係ない。

それはもちろん『負けない』からだ。

こんな田舎の高校に行っている奴に負ける訳がないと踏んでいるのだ。

実際に今までどんなに年上相手の喧嘩だろうと負けたことがない。

一方的に天音が殴るだけで喧嘩は終わる。

赤い髪の男と天音の間にどちらかがアクションを起こせば殴りかかるのではないかという空気が漂う。

その空気を察した、枝垂桜が大きなため息を吐きながら、覚めた声で天音に注意を促す。

「天音君が悪いわよ。年上の方への礼儀はしっかりしなきゃね。もしかして忘れてるのかしら？」

枝垂桜も意地悪そうな笑みを浮かべて天音の眼をしっかりと捉える。

天音は枝垂桜の冷たい視線に射抜かれ、冷や汗がたらりと背中から流れるのを感じた。

天音は短く「了解です」と言い赤い髪の男に素直に謝った。

赤い髪の男が天音の事を知っている理由はライセンスに貼ってある顔写真をしっかりと覚えていたからだ。

依頼主が顔を覚えていなくても最悪メールはできるのでどうにかなるのだが、基本依頼主は顔を覚えている人が多い気がする。

短い沈黙が三人を包む。

改めて枝垂桜にジーと眼を見つめられ軽く照れてしまっていると、枝垂桜はぷるぷると拳を軽く突き上げるような仕草を見せる。

たぶん、この状況を早く進めてくれ。という合図なのだろう。

そうと分かれば天音の行動は早かった。

依頼は相当な数をこなしている天音にとって仕事の話。となれば自然と切り替わる。

早速軽い自己紹介から始める。

「俺の名前は霧埼です。以後お見知りおきを」

そう言い軽く会釈をする。

見る人が言うには「中学生らしくない」というのだが、天音は少しでも大人らしく見せるためにあえてこの口調を好んで使っている。

その後に枝垂桜が丁寧に自己紹介を終えると最後に赤い髪の男が短く自己紹介をした。

赤い髪の男の名前は〈谷川　大知〉と言うらしい。

今更だがいじめに遭っているようにはとても見えない。

どちらかと言うと……逆だろう。

天音と枝垂桜は黙っている。

依頼主から内容を話すを待っているのだ。

いつもならこちらから聞き出すのだが、天音は何となく違和感を感じ話し出すのを待っているのだ。

ほどなくして大知が静かに語り出した。

大知は詰まりながらも少しずつ言葉を発している。

同じクラスにいじめられている奴がいる。そいつを助けてやってほしい。

簡単に言えばこれだけの依頼だ。

天音にはこの依頼が特別な依頼の理由が一切分からない。
いじめの実行犯を懲らしめて終わり。ただそれだけの簡単な依頼。
言い方は悪いが、所詮Dランクの依頼。

ここまで考えると天音はふと思った事を口にしてみる。

「大知さん本人がいじめを受けている訳じゃないのに、わざわざ他人のために依頼を？」

大知は「そうだ」と短く答え、それ以上は自分から依頼に関して口に出すことはなくなった。

そこで天音は枝垂桜の方へ視線を送る。
何か聞きたいことはあるか？　とアイコンタクトを送る。
すると、枝垂桜は静かに首を横に振る。

二人は何度も言うように、組んだことはもちろんない。
それでもアイコンタクトが伝わる理由は、単純に慣れだ。
枝垂桜もかなりの数の依頼をこなしている。
このタイミングで天音が枝垂桜に視線を向ける理由は一つしかないのだ。
「質問することはある？」これだけだろう。

枝垂桜からの質問がないと分かると天音は早速本題に入った。

「それで、その方は今どちらに？」

その方。というのはいじめを受けている人の事。
いじめを行っている犯人達を早速懲らしめに行ってもいいのだが、天音はこういう心理的にもダメージのある事件ではなるべく当事者

とコミュニケーションを取るようにしているのだ。

「この時間なら学校だろうな」

大知が言うには夏休みはお盆を除き、ほとんど授業があるそうだ。

「へぇ……そっか赤い髪ですもんね」

学校があるはずなのにここに来ているって事は……悪い子くらいだろう。

大知の通っている学校は確か学業優先の学校だったはずだ。

と、言っても学生が依頼を申請する場合は、授業がない日。が基本なのだ。

今は夏休みなので緩いのかもしれないが、長期休暇でもない平日などに依頼を申請するとよほどの事じゃない限り通らない。

「ん？　なんか言ったか？」

幸い天音がぼそっと口走ってしまった言葉は大知には聞かれていないようだったので、両手の顔の前でぶんぶんと振り「なんでもありません」と否定する。

横目でジトーとした目で見ている枝垂桜にはどうも聞かれたらしい。

大知が視線を移した瞬間に、天音の横腹に枝垂桜からの右ブローが華麗に決まった。

天音は地面に膝をつき崩れ落ちる。

「っふぐ！……枝垂桜さん……運動神経物凄く良いんだな」

この右ブローも異常に速かった。
視線を移した瞬間に、間を空けずに放ってきたのだ。
プロボクサーもビックリの集中力とパンチ速度だろう。

「……何回言ったら分かるのよ」

「へ？　な、なんて？」

珍しく天音が聞き逃す。
小さく呟いたのももちろん原因だろうが、大きな原因は右ブローが綺麗に決まり過ぎ、額から汗が出てき話に集中できなかったのが大きな問題だろう。

「な、なんでもないわよ！」

顔を朱色に染めると、ぷいっ。と視線を大知に逸らしてしまう。
天音は少し残念だな。と珍しくも思い、額の汗を腕で拭うように額に腕を持っていく。

◇◆◇◆◇◆◇

枝垂桜の右ブローが決まり辛そうにしている天音を尻目に、

（な、なんで一回で聞き取らないのよ……。……慣れていないんだから、あれだけ見つめられたら照れるじゃない！　慣れていないからだけど！）

などと、両手を頬に当てながら自分の世界に入ってしまう。

◇◆◇◆◇◆◇

大知はというと……この状況を分からないでいた。

（な、なんでこいつ等、変な空気なってんの！？　女はなんか顔赤いし……男はなんだか苦しそうにして額から汗かなり出てきてんだけど！？　何があったんだ？）

大知は一瞬周りを見てどこかで時間を潰せるとこはないかと周辺を見回していただけなのだが、気が付いたらこの状況だ。

少しの間黙って二人を観察していると、先に女の方がこちらの世界に戻ってきた。

男の方は復帰にはもう少しかかるみたいで、未だに地面に膝をつけている。

女は何やら男の方へ心配な顔で男の顔を覗き込み必至に頭を下げている。

そこで大知は、どうしたもんか。と悩んでいると、聞き慣れた声がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1027w/

スキルという名の超能力

2011年9月3日15時28分発行